

研究動向

英米における中国中世貴族制研究の成果と課題^①

ジ ヨ ン 〃 リ

英米における中国中世史の研究は七十年代に入ってようやく成熟期を迎えたように思われる。

このことをもつとも象徴的に表すのが一九七九年に出版された『ケンブリッジ中国史』隋唐編上巻である。私はかつてこの書物を評して英語圏中国中世史学の成年宣言と呼ぶのにふさわしいといったことがある。^②たとえそこに現れた水準が中国や日本のそれにはまだ及ばないとしても、将来に期待できるだけの素地が十分見られるからである。

中世は、英米のみならず欧米全般における中国史研究のなかでもっとも遅れている分野ともいえよう。単に研究者の数だけでなく、研究の成果においても質量ともに他の時代に遙かに及ばない。周知の如く、古代史や近現代史の方面においては西洋史や社会科学の諸分野で開発された理論を導入した漸新な研究が少なから

ず欧米学者の手によって発表されている。しかるに中世史は、この時代に対する学問的関心が文化的側面に偏重されていた現象も手伝って、歴史の流れの体系的な理解さえ十分でない状態である。

こうした背景より考えると中世史研究の進展は、英米中国史学の健全な成長のためにも喜ぶべきことである。それゆえ、今の時点でこれまでの中世史研究の成果を整理し未来を展望することも一応意味があるように思われる。

ところで中国中世史においてもっとも大きい研究の対象になって数多い論争をも起したのが貴族制である。英米の場合も貴族制は広く研究者の関心を集め、かなりの量に及ぶ研究が行われて来た。

従って小稿では、貴族制をとらえて、英米における中国中世史

研究の成果を概観する作業の一環としたと思う。まず今までに発表されたいくつかの論著を紹介し、現段階の研究が抱えている問題点を指摘したあと、今後の課題を私見を加えながら述べたいと思う。

(1)

英米の学者のなかでもっとも早く中国中世の貴族制に対して注目すべき見解を世に披露したのは、ヴォルフラム・エバーハート (Wolfram Eberhard) である。エバーハートの見解は最初その大著『中国史』(A History of China) で明かにされ、のち『征服者と統治者—中世中国における社会勢力』(Conquerors and Rulers: Social Forces in Medieval China)、『華北の拓跋帝国』(Das Tobareish Nordchinas) などの論著によって追加補訂されたが、その大要は次のようである。

まずエバーハートは三段階式時代区分法を導入し中国史を古代・中世・近世と分け、前漢より唐までを中世とする。そして中世の特徴として「ジェントリー」(Gentry) 社会を取り上げる。このジェントリーとは、彼によると土地の所有がその身分的基盤となった階級である。

ジェントリーは原則として地方に住み、荘園主あるいは在家地

主としての生活を営んだ。一方、官界に進出した一族によって中央で分家が造られ、経済力を持った本家と政治権力を握った分家との緊密な協力がジェントリーの勢力を守ってくれたのである。

ジェントリーは時代と共に次第に貴族化して行ったが、その過程に大きい刺激を与えたのが北方民族の侵入であった。何故なら北方民族の社会では封建制に近い貴族制が秩序の根幹をなしたからである。

貴族化されたジェントリー社会は隋唐帝国の下で頂点に達したが、その後種々の政治・社会的圧迫を受け衰退して行った。なかでもっとも打撃が大きかったのが「中間階級」(middle class) の抬頭であって、またこの現象こそ宋以後の中国社会が近世に入るきっかけでもあった。

このようなエバーハートの論旨は発表当時としてはかなり革命的なものであった。『中国史』が出現したのは戦後間もなくだが、その頃の欧米における中国史の叙述はおおむね宮廷秘史や帝王物語の領域を越えていないままの状態であった。従ってエバーハートのような、中国史の流れを整然とした理論と深層構造の分析によってとらえようとする試みが投じた波紋の大きさは十分想像できる。

にもかかわらず、エバーハートの所論はいくつかの顕著な弱点

をもつていたために、大きな共感を得ることなく讖辭とともに攻撃の対象ともなったのである。なかでも概念の不透明さと、論点が史料などによって十分証明されていないということがよく指摘された。そしてこのような角度から中世社会をめぐるエバーハートの解釈を批判したのがエドウィン・プリーブランク (Edwin Palletybank) である。

プリーブランクは『中国史』の書評でジェントリーを取り上げ、このうえなく乱雑な概念である。支配階級を総括しているのかと思つたら場合によっては非常に制限された意味で使われている。^⑥

と非難し、それはさしたる根拠もなく九割ほどはエバーハートの空想に基づいたものにすぎないと酷評した。それにとどまらず彼は、

唐の政治史を理解するためには、世襲的特権を固執する旧来の貴族と学問あるいは文才によって官界に進出した新興「ジェントリー」階級との葛藤に対する理解が先行しなければならぬということが、陳寅恪その他の研究によって既に明らかになった。^⑦

といい、ジェントリーということはそのものに新しい解釈を加えたのである。

このような攻撃に対してエバーハートの反駁が発表されたが^⑧、結局論争というところには行かずに終ってしまった。それにしてもこの二人の意見の衝突がかなりの注目を浴びて、その後の研究における牽引的な役割を果たしたことは否定できない。

エバーハートはそもそもドイツ生まれで、マックス・ウェーバー流の歴史社会学の訓練を受けた人である。そのせいか彼の学説にはどこかヨーロッパ人の中国史に対する伝統的な見方がうかがわれる。それは即ち、ヨーロッパ史との比較のうえで、あるいは世界史に共通すると見られる現象の一環として中国を理解しようとする態度であろう。そして同じ態度が、研究の具体的なやり方においては、分野外より持ち込まれた理論の強調と第二次文献、特に中国と日本の学者の研究の軽視ないし無視といった形で現れたのである。

このようなエバーハートをプリーブランクが陳寅恪などを引いて批判したことは、当時一五十年代初めの英米中国学における新しい動きの反映ともいえる。プリーブランクは、エバーハートとは対照的に、いわば新しい世代の中国研究者に属する人であった。それらの人々はおおむね第二次世界大戦をきっかけに学究の道に入っており、中国や日本での研鑽などの経歴をも持っていた。そして彼らは単に中国語や日本語の文献に対する知識と教養を身に

付けただけでなく、中国と日本の先進的な研究を積極的に受容することによって、英米での研究水準の向上を計ったのである。

戦後の英米における中国史研究は結局このような学者たちが主導することになるが、中世史も例外ではない。だからこそエバーハートの唱えた「ジェントリー」論は共感を得られず一つの挿話として終ってしまったのであろう。

一方、ブーリブランクはそれ以上貴族制の研究を進めなかったが、彼の名著『安史の乱の背景』(*The Background of the Rebellion of An Lu-shan*)に書かれた初・中唐の政治史の分析を見る限り、最後まで陳寅恪の理論に忠実であったことがわかる。⑧このような彼の見解は、更に陳寅恪本人の名声も手伝って、相当の間英米の研究者に広く影響力をもつようになったのである。

しかし陳寅恪説のほとんど無批判的な受容も六十年代末にはデニス・トウィッチェット(Dennis Twitchett)によって正面から反省が提起されることになる。

一九六九年、英国のケンブリッジ大学で、英米のみならず他の西ヨーロッパ諸国と日本の学者をも招いた国際学術会議が開かれ、唐代の政治、社会、制度、文化の全般にわたる討論が行われた。

その席上で発表された論文はのち『唐への視角』(*Perspectives on the Tang*)^⑨と題で編集され上梓されたが、そのなかの一つ

にトウィッチェットの「唐代支配層の構造―敦煌発見の新資料を手がかりに―」(*The Composition of the Tang Ruling Class: New Evidence from Tun-huang*)^⑩があった。

この論文でトウィッチェットは―中国と日本までも含めた―従来の唐代貴族制研究におけるいくつかの問題点を指摘し、敦煌発見の氏族志残片などの新しい解釈を通じて唐代の支配階層の構成を明かにする一方、将来に向けての研究の道を示そうとしたのである。

まずトウィッチェットは従来の研究における二つの主な欠陥として、専ら最上級の貴族―彼のいうスーパー・エリート(*super-elite*)―のみを対象としたことと科挙に対する評価が余りにも高すぎたことを指摘している。

従来貴族といこうとばは、朝廷の重要な職位を独占していたいくつかの氏族とほぼ同義に使われて来た。しかしそれら名族はあくまでも貴族の最上層を占めたものにならず、名声と力ではそれに及ばないとしても間違いなく貴族であるという家柄が全国にわたって散在していたのである。つまり当時の支配階層におけるいわばピラミッド的構造を認めなければならぬ、と彼は主張する。

トウィッチェットによれば、このような事実は敦煌氏族志の残片によろくかがわれる。即ち敦煌の氏族志は、

単に地方の名門の家柄を記録したのにすぎず、全国的な意味を持つものではなかった。^⑩
従って、

最上級の貴族をもっと正確に定義するためではなく、この比較的の小規模の階層をいっそう広い社会構造の——最高の——一部分として正しく位置付けるために役に立つものである。^⑪

いいかえれば敦煌の氏族志によって地方には地方なりの貴族制的秩序が存在したことがわかる。しかも敦煌の氏族志は、

全盛期の貴族によって支配された政府が社会の階層化を進めるために作ったというより、政治・社会・経済上における種々の変化がもたらした圧力の下でヒエラルキー的な秩序が既に崩れてしまった段階で、そういった秩序を復旧しようとした願い、あるいは単なる過去へのノスタルジーが生んだものと見るべきである。^⑫

しかし一方、敦煌のような帝国の外郭地域にかなり遅くまで貴族制的秩序が残っていたということは、唐代社会の体質を無言のうち語ってくれることにもなる。ここでトウィッチェットは、「旧来の貴族と科挙によって登用された新興職業官僚集団との間の闘争をその特色とする一種の転換期」として唐を把握しようとした従来の研究傾向に疑問を投げ、唐代貴族制に対する全面的な

再検討を促す。

彼によると、科挙を通じて官界に進出した人々は必ずしも庶民出身ばかりではない。むしろ地方のエリート——即ち地方の名望家——出身と見るべき人が多かったのである。そしてこのようないわゆる新興官僚たちは旧来の貴族に敵対心ではなく同類意識を持っていた。即ち彼らは自らを貴族と思い、旧貴族の在り方を憧憬あるいは模倣し、通婚などを通じて仲間入りを計ったのである。

科挙は、だから貴族制の性格を変えたとはいえ貴族制そのものに致命的な打撃を与えたとは思われない。なお庶民の官界進出が容易になったのも、科挙ではなく安史の乱以後の混乱期に出現した使司制、辟召制などを通じてである。

大体以上のような理解のうえでトウィッチェットの論文は地方エリートに性格の究明を今後の研究における最大の課題として提起した。これら地方の実力者たちの規模、勢力、在り方及び中央とのかわり方が明らかにされない限り唐代貴族制の真の意味を知ることが不可能である、と彼は主張したのである。

トウィッチェットの唐代貴族制の理解、とりわけ陳寅恪説及び伝統的な科挙観に対する批判は、彼固有のものではない。周知の如く、丁度同じような解釈が当時特に日本の学界において広い共感を得つつあったのである。トウィッチェットの論文は、このよ

うな意味で、英米での研究が一応その他の先進水準の研究と呼吸を共にするようになったことを表すものともいえよう。

こうして着実な成長を重ねて来た英米の中国中世貴族制研究は、七十年代後半には二冊の重厚な研究書の出現を迎え、いっそう発展に向って行く様相を示す。一九七六年にデビッド・ジョンソン (David Johnson) の『中国中世の貴族制度』(The Medieval Chinese Oligarchy)^⑮ に次いで一九七八年にはパトリシア・イブリー (Patricia Ebrey) の『前期中華帝国における貴族—博陵の崔氏研究—』(The Aristocratic Families of Early Imperial China: A Case Study of the Po-ling Ts'ui Family)^⑯ が出版されたのである。

ジョンソンの著書は次のような質問を投じることより始まる。

中世中国の人々は自分たちの社会をいくつかの階層によって組み立てられたヒエラルキー的な存在として把握したのか。

もしそうであれば彼等は権力と名譽を併せもった最上階層をどう名付けて呼んだのであろうか。^⑰

ジョンソンは、中世中国ではヒエラルキー的な社会構造の最上層部を占めていた「社会集団」(social group)があったといい、その集団は、伝統的な意味での士大夫でもなければのちの時代のジェントリーとも違った、貴族とすべき存在であったと論ずる。

彼によれば、この集団への参加資格は家柄の高下によって決められた。しかし家柄の高下を決めたのは、官職の有無高下であった。いいかえれば、官職が家柄を高くしてくれるのだが、そもそも家柄が高くないと官職は得られない、といったパラドックス的な状態が中世の身分秩序を特徴付けたのである。

ジョンソンの著書の相当部分は、正史の列伝、敦煌氏族志、金石文資料などの分析を通じてこのような論旨を証明するために割かれている。その結果、漢より唐に至るまでの中国はいくつかの名門が実質的に支配したと結論し、それゆえに当時の政治は寡頭政治 (oligarchy) とらうにふさわしかったと主張した。

中国中世の貴族は官職を独占することによってその政治・社会・経済上の地位を維持したのである。官僚になることは貴族の本来的姿であって、代を兼ねて高官を輩出することは名門に与えられた最大の課題であった。

ジョンソンは更に中世貴族の没落の原因をも、このような貴族と官職とのいわば不可分離の關係に求めようとする。

即ち唐で確立された科挙制により、官僚になるための基準が家柄より才能へと変ったのである。科挙は國家の構造を貴族制より官僚制に直ちに転換させる機能は果さなかった。しかし新しい制度の下では、たとえ貴族出身の人でも才能がない場合は官僚にな

ることができなくなつたのである。従つて貴族は、科挙制を容認することによつてその地位を支えて来た第一の基盤を自ら手放す結果となり、安史の乱以後の混乱期を生き残ることができずに没落してしまつたのである。

中世貴族の没落に対するジョンソンの関心はその後間もなく発表された「門閥貴族の最期—唐宋初における趙郡の李氏—」(“The Last Years of a Great Clan: the Li Family of Chao-chün in Late Tang and Early Sung”)と題した長文の論文でまた表されている。

この論文は、題の示す如く、趙郡の李氏といった特定の事例を通じて中世の貴族が没落して行く課程を究明しようとしたものである。まずジョンソンは南北以降唐宋に至るまでの間における趙郡の李氏の在り方を追跡し、この数世紀にわたる時間の経過のなかで趙郡の李氏は単なる地方の名族より国家的次元の貴族へと転身したと理解した。その必然的な結果として李氏の活動範囲は趙郡の故地を越えるようになり、¹⁰地方における基盤が次第に弱くなって行つたのである。しかも一族の全国にわたる分散が同族の間の結束力を弱化させ、唐代の頃には趙郡の李氏とは既に一つの「概念」(idea)にすぎなかつたのである。

地方における基盤がなくなり、一族の間の結束も弱まつた貴族

にとつては、王朝への依存が生存のための唯一の道となる。だからこそ科挙制の確立がもたらした官職独占の喪失が終局的には貴族を没落の命運に追い込んだのである。

以上のような解釈をジョンソンは趙郡の李氏の事例を通じて行なつたのである。いいかえればこの論文は自らの論旨を実例を持って裏付けようとした試みの所産であろう。

個別的な事例を通じて中世貴族の姿を描こうとした点ではイブリーの研究も同じである。但し彼女の場合、更に視野を広げて後漢末以降唐宋に至るまでの中世全期をその対象としている。彼女は著書で台湾の中央研究院に収蔵されている四十二種の未公開金石文資料—主に唐代博陵崔氏の墓誌銘—を使うなど、実証に意欲を見せている。しかし新資料発掘に対する関心のわりに彼女の貴族制理解そのものは従来—というよりその師でもあるジョンソン—のものと余り違わないといわざるを得ない。

イブリーは、ジョンソンと違って、官僚になることが貴族になるための先行条件であつたと見てはいない。その代わりに貴族の「身分階層」(status group)としての性格を強調し、貴族を貴族たらしめたのは官職ではなくて慣習、礼儀、教養、趣味などの諸要素であつたと論ずる。

にもかかわらず一方では、

官職は身分の高さを証明するのにもっとも簡単な手段であった。このような官職と身分との関係が定立されると、たとえ暫定的であろうと官職の経歴がない者が高い社会的地位を享有することは極めて難しくなったのである。^①

といい、事実上身分と官職とが不可分の関係であったという主張に同調している。実際、イブリーの貴族制理解が貴族⇨官僚貴族の立場に基づいていたことは読み進むにつれて次第に明かになる。要するにイブリーがジョンソンと違うところは官職にさほど比重を置いていないということだけであろう。

中世貴族の盛衰に対するイブリーの解釈もジョンソンと大きく違わない。例えば

博陵の崔氏という言葉は唐代になっても依然として大きな意味を持っていた。しかしそれはもはや血縁組織というより身分構造上の一単位としての意味が強い言葉だったらしい。^②

といい、更に

唐代における博陵の崔氏は身分上の理由でお互いを一族と認めただけで（強い）同族意識を持つてはいなかった。^③

といているところは、趙郡の李氏が唐代になってはすでに一つの「概念」にすぎなかったというジョンソンの主張とまさに発想を一つにしている。

博陵の崔氏のなかで同族としての結束がゆるんだ原因としては、イブリーもジョンソンと同じく一族の分散とそれに伴う地縁・血縁の崩れを指摘している。彼女は唐代の博陵崔氏の墓誌の多数が洛陽付近で出土したことに注目し、これは唐代になってからは他地に住む博陵崔氏の間で先祖の故地に埋葬をする習慣さえなくなってしまうた証拠である、と主張する。

同族同士の結束を更に弱くしたのは、家系の造作の盛行である。イブリーによれば、新・旧の『唐書』に載せられている博陵の崔氏の列伝のなかにはその家系の真偽が疑わしい事例が数多くある。これはやはり博陵の崔氏を偽る家柄の数が漸増した現象を反映するのではなからうか。そしてまた博陵の崔氏の血縁組織としての性格が薄くなったことを意味するのでもある、と推定する。

とはいえ、貴族の成立における官職以外の要素を重視したイブリーは、その没落においても官職独占の喪失だけを原因と見てはいない。原因はもっと根本的なところ、即ち文化及び社会の変化に求むべきだと、彼女はいう。

貴族は特殊な慣習や在り方を通じて他の階層との距離を維持することによって、その「身分階層」としての存在を可能にしたのである。それゆえ、社会の変化は貴族を一種のディレンマに追い込んだ。

もし新しい態度や在り方に従えば他の官僚との間の違いがなくなってしまう。しかし一方、変化に感じなければ旧態依然あるいは異常と見なされることになる。^②

しかるに旧秩序の産物である貴族が新しい時代に生き残ることは最初から期待し難い。結局、博陵崔氏やその他の唐の貴族は、宋以後の新社会に向って行く激しい変動のなかで唐王朝と運命を共にしたのである。イブリーの解釈は、このような意味では貴族の最期を唐宋変革という歴史的転換を背景に、より視野を広げて見ようとした試論と評価できるだろう。

(11)

中国中世の貴族は如何なる存在であっただろうか。そしてまた他の時代の支配階級とはどのように違っていたのだろうか。

この二つの相互に関連のある問題が、今までの中国中世貴族制研究の中心をなして来た。中国中世の貴族に対する種々の違う見方、例えばそれを封建的大土地所有者とする見方、官僚貴族とする見方、郷村共同体の指導者とする見方などは、それぞれ立場と解釈に差があるにせよ、いずれはこの二つの問題にかかわっている。

制度を時代の産物とするならば、そこにはその生まれた時代の

特徴が現れているはずである。従って、制度の性格を究明することによって時代の特徴を理解し得るし、逆に時代の特徴を前提とせずに制度の本来の姿を明かにすることはできない。

中国中世貴族の性格を究明する作業が、次第に中世という時代を特徴づける産物として貴族を捉える方向に向って行ったのも、結局このような事実の反映ではなからうか。

外国の一研究者の目に映った日本の中国中世貴族制研究の辿って来た道こそ、その良い例である。

周知の如く、日本では早くから貴族の大土地所有者としての性格が否定されていた。そして貴族を教養貴族あるいは門閥貴族と見なす認識が生まれたが、代りに貴族の自立度が問題とされ、貴族の王朝への依存度を強調する側とその自主性を重視する側との論争が生まれたのである。この論争は貴族制認識の促進に大きな役割を果たしたが、未だに帰着に至らず今後も当分は続くように見うけられる。

これから先の展望はともかく、今までの貴族の自主性をめぐる論争のなかでもっとも注目すべきは、私見によれば、共同体の指導者として貴族を把握する見方の抬頭である。そしてまた中国中世の貴族制研究に日本の学界が果した、もっとも大きい貢献ではないかとも思われる。

貴族を共同体の指導者とする見解は、ふつういわゆる官僚貴族説とは正反対の立場を取っているように理解されている。しかし

共同体論者たちが貴族の官僚としての性格を全く否定するわけではない。ただ官僚になることが貴族を貴族たらしめる前提条件であったか否かという点と、更に貴族と国家(あるいは王朝)とはどのようなかわりで結ばれていたのかという点で見解を異にするだけである。いいかえれば、この二つの学説の違いは、「当時の支配層が国家権力の存在によって始めて成立し得ているという意味で官僚的であるのか、それとも、支配層は国家権力の存在を前提とせずそれ自身として支配層であるが、ただその存在形態において官僚的性格を帯びるのかという問題に帰着する。」^④

共同体指導者説と官僚貴族説とのどちらの方が正しい—というよりもっと当時の現実接近している—かを考えるためには、当時の歴史的条件を念頭に置く必要がある。つまりここであらためて中世という時代の特徴を検討しなければならない。

中世とはいったいどのような時代であったのだろうか。私の考へでは中世はやはり統一された権威が崩壊してその代りに出現した分裂の状態がもたらした時代である。そして分裂より再び統一へ向って行くところにこそ、中世における歴史発展の持つ意味があるように思われる。ヨーロッパの中世がまさしくそのような時

代であって、^⑤ れわれわれが後漢末以降唐末までを中国においての中世とする理由も恐らくそこに求められるだろう。

とすれば、中世の大きい特徴の一つは、国家権力の顕著な不在であり、政治的秩序と社会的秩序との間の甚だしいギャップともいべきである。換言すれば、中世の支配階級は国家との緊密なかわりではなく、むしろ強力な国家権力が不在であるという現実のうえでそれを代行することによって自らの存在を維持し正当化したのである。

ヨーロッパ史の場合、このような視角から中世の支配層を理解しようとしたものに、例えばマルク・ブロック(Marc Bloch)による封建制の研究がある。

ブロックは、カロリング帝国の崩壊後の混乱状態からヨーロッパ中世の支配層が生まれたといい、民衆の保護者としての役割を果たした支配者と民衆とを結んでいた私的・人間的関係が主従関係に発達し、のちの封建制の起源となったと説明した。^⑥

ブロックのこのような解釈は、中国史における日本の共同体論と基本的に同じ方向に向いているといわざるを得ない。ブロックの研究がヨーロッパ中世及び封建制研究に新しい一章を開き、たとえその説の一部が疑問視されていても、^⑦ 今日に至るまで不動の位置を堅持している原因は、恐らく中世という時代の特性

を看破したところから来る説得力の強さにあるのではないだろうか。そしてまた同じ評価を日本の共同体論に対しても与えることができると思われる。

さて、学説史のこのような流れのなかで英米の学者による研究の成果をどう位置付ければよいだろうか。

一言に言ってこれまでの英米での中国中世貴族の認識は官僚貴族の枠を大きく超えていない。貴族の本来の道は官僚になるところにあって、官職こそ貴族を貴族たらしめるもっとも根本的な条件であった、という認識が英米学者のなかに根強く存在している。

だからこそ英米の学者が実際に研究を行うに当っては、ひたすら正史その他の資料からそれぞれの人の官歴を掘り出し、その官職の高下のみを問題にしたうえで所論を展開するのである。

このような研究態度に対しては英米の学者のなかで全く批判の声がないわけではない。例えばデニス・トウィッチェットがその論文でこの点を指摘して反省を促している。

しかしトウィッチェットの場合、批判的になったのは、専ら中央の高官を対象としてそれを独占したいくつかの名族のみを貴族とする傾向であって、貴族⇨官僚という認識そのものまでには及んでいない。むしろ唐代のほぼ全般を通じて仕官者のおおむねが（庶民ではなく）貴族ともいべき身分の出身であったという

点においては、彼の貴族制理解も官僚貴族説に止まっているといわざるを得ない。

トウィッチェットよりもっと根本的な批判の声は、ロバート・ソマーズ (Robert Somers) より聞くことができる。ジョンソンとイブリーの著書を評した文章でソマーズは、

分裂と混乱によって代表された時代に官職がそれほどの重要性を帯びていたかと考えると、確かに一種のアイロニーを感じる。^②

といい、二人のアプローチに疑問を投じている。この素朴な疑問は、中国中世の貴族制研究の核心に触れている。あれほど王朝の交替が頻繁であって、しかも異民族の支配下にさえ置かれていた時代に、官職がどれほどの魅力を持っていたのだろうか。換言すれば、当時の支配層にとっては、ある特定の王朝との緊密な結合がむしろ損になる場合が多かったのではないかという疑問を、すべての精緻な理論を展開する前に念頭に置く必要があると思われる。

貴族⇨官僚説に対する英米学者の執着に近い確信はどこに由来するのか。こういう疑問にソマーズの批評は一つの明快なヒントを与えてくれる。

ソマーズは、ジョンソンの貴族制理解が、例えば何炳棣、張仲

礼などの明清支配層研究と^⑨基本的に共通する認識に基づいていることを指摘した。それは、中国の社会構造を士人あるいは官僚と庶民との二つの階層に分けながらも両者を本質的に同じ物と理解し、しかも一種のメリトクラシーによる両者の間の流動性を認める考えである。ジョンソンは、科挙合格者のみを士人のカテゴリーのなかに入れた何・張とは違って、中世の貴族を一例えば官僚の親類をも含むより広い階層として把握してはいるが、「官僚組織のなかにいるか外にいるかによって身分の高下が決められる」という点では全く同じ水平に位置している。

ところが、同じ指摘は、ジョンソンのみならずエバーハートとイブリーの場合にもいうことができる。ジョンソンを批判しながらも終局的には彼より一步も進まなかったイブリーの場合はいうまでもない。エバーハートも、彼のいう「ジェントリー」が、本人の定義はともかくとして明清時代のいわゆる「郷紳」をモデルに抽出されたような疑いが強い。こういう意味では、乱雑を極めた概念といったブリーブランクの非難も一理あるといわざるを得ない。

イブリーはその著書の冒頭で次のように書いた。

帝制時代の中国の支配層は世界史に類例のない存在であった。何故なら社会・文化・経済の分野において最高の地位を占め

た人たちがまた政府の官僚になって統治に当たったからである。(中略)しかし前期帝制時代の中国の階級構造は他の前近代社会と比べてさほど違うものではなかった。上層階級を特徴付けたのはやはり財産、生活習俗、伝統的な価値の遵守、そして政治権力との密接な結びつきなどであって、官僚制の本質とは関係のない血縁、地縁、パトロネージなどが政治・社会の面で大きい比重を持っていたのである。^⑩

にもかかわらず、客観的に見ると、イブリーが前期と後期の前近代中国の支配層の違いを明かにせず、いわゆる官僚制とは無関係の諸要素も結局官僚になるための手段にすぎなかった、という結論を出したのは、看過できない皮肉である。

とすれば、そのような結果をもたらした原因はどこから来たのか。

イブリーの言葉には、欧米の学者が中国研究に臨むさいの典型的な姿勢が知らず知らずのうちに表われている。即ち「世界史に類例のない」という観察である。欧米学者の中国観には中国を一つの別の世界、あるいはいわば歴史発展の常軌よりはずれた存在として把握しようとする意識が強く作用している。このような考え方は―良い意味であれ悪い意味であれ―自分らの世界とは違った世界を中国―もしくはアジア―に求めた欧米社会の歴史的傾向

にその由来を遡ることが出来る。欧米人にとって中国は、常に一つのアンティテーゼであって、そういった中国が欧米の国々とはほど違わない道を辿って来たという仮定は、想像さえもできないことであった。欧米の歴史が自由に向かつて行く大きい流れだったとすれば、中国は一貫して専制の国であって、欧米における歴史の展開の根本が「発展」だとするならば、中国は「停滞」そのものだったのである。

以上のような背景を考えあわせて見ると、近世後期の支配層の諸様相をもって他の時代にも適用するとか、専制的皇帝権に仕える官僚としての支配層の在り方を全時代に共通するものとみるなどの発想が、いかに生まれ易いかが十分理解できる。

今まで述べたのはあくまでも私見にすぎない。しかし歴史的背景が人の考え方に与える影響は十分考慮に値すると思う。日本の歴史の経験が日本の中国研究に与えた影響はよく知られている。欧米の研究を評価する際にも同じことを念頭に置くのは、より正しい理解のために役に立つと思われる。

さて、小稿で紹介した現今に至るまでの英米における中国中世貴族制研究の成果を総括して見よう。

一言でいえば小稿で紹介した諸研究は、部分的にはかなりの成果を成し遂げていながらも基本的なところに欠陥があるといわざ

るを得ない。いうまでもなく中世といった時代の性格の把握にかかわるところである。

小稿で紹介した英米学者のなかで少しでも中世の—他の時代とは違った—特質を考えたいうえで論旨を展開しようとしたのは、エバーハートくらいであろう。しかし彼の所論が抱いている問題点はすでに指摘した通りである。ジョンソンやイブリーになるとそういった意識の片鱗も見えない。彼らが「中世」とか「前期中華帝国」^⑧とか言う場合、それは恣意的かつ便宜的な呼び方にすぎず、明快な理論とそれを支える実証をもとに構築された時代区分の方法とはどうしても考えられない。それならばむしろ旧態依然とした王朝別の時代区分法のほうが混乱を防ぐために役に立つかも知れない。

英米における中国中世貴族制の研究は、再三言及する必要があるが、日本の先進的な研究に負うところが多い。このことは小稿で紹介した—エバーハートを除く—諸論者を見ればよくわかる。にもかかわらずこれら論者のなかに日本学界の優れた所産である共同体理論が全く取り上げられていないのは何故だろうか。

共同体理論に同調しなかったといって批判するわけではない。しかしあればと反響を起し、かつわれわれの中国中世貴族制理解を大きく前進させた理論を無視しては、既存の研究成果を十分

参考したとはいえないだろう。

恐らくこれは前述した欧米学者の意識とかかわる問題ではないかと思われる。共同体理論の優れた点は、中世といった時代の特質を大前提として分析を行うところにある。しかし前近代中国は停滞した社会であったという固定観念で考えが固まった人には、ややわかりにくいところかも知れない。そういう人々にとってこの理論は、理想的な観念論にすぎないと見られるかも知れない。

ジョンソンとイブリーが中世貴族の没落して行く過程で地方における基盤の喪失を重視したことはすでに述べた。しかしこの場合の「地方」は、一族を支える経済的基礎——つまり土地——のあるそして万一の時には中央から帰って行くことのできるようなところという意味で使われたのにすぎない。そういった意味での地方はいつの時代にも存在したのであり、中世の時代的特質が表われているとは必ずしも言い難い。

日本の学風には貴族と外部世界との関係を強調する面がある。官僚貴族論やら共同体指導者論やらという諸学説はすべて貴族と——国家、王朝、あるいは鄉村社会といった——より大きい世界との関わり方を究明しようとした努力の所産ともいえよう。

それに比べて英米の学者の場合は、関心がむしろ貴族の内部世界に向っているような気がする。貴族の規模、生活様式、そして

貴族の家柄内部の結束手などの問題に示された関心こそ、このような傾向の表われてはいないと思われる。

日本と英米との学者の間の違いは、中世貴族の没落に対する解釈にもうかがうことができる。

日本では、隋唐による統一より唐末に至る間に貴族制において重要な性格上の変化が起きたとする点で大体意見が一致しているらしい。その経過は、貴族の自立性の喪失ともいわれ、「門閥貴族」より「王朝貴族」へという言葉によっても表現されている。ところでそのような変化の原因としては外部的な要素がやや強調されている。詳しくいえば国家権力の強化である。即ち統一が強力な国家権力の出現を可能にさせ、貴族の自立性が次第に奪われるとともに王朝への依存度が強まり、終局的には王朝と命運を同じくすることになった、という解釈である。

唐を貴族制社会における一つの転換期と見なし、統一による国家権力の強化を重視するという点では、英米の学者のなかでも大きな異論はない。しかしジョンソンやイブリーの例で見られる如く、彼らの解釈にはやはり貴族の内部的变化に焦点を合わせるところがあるといえよう。

ジョンソンとイブリーの試みは、今まであまり注目されなかったところを取り上げた点で一応の意義を認めざるを得ない。制度

的側面における貴族制の変化が、貴族の自らの位置に対する認識、一族のなかでの結合の仕方及び結束力、そして生活様式などというふうな影響したかという問題は十分考慮に値する。単に國家権力が強くなったというだけでは、何故貴族がある特定の王朝と運命をともにするようになったかが説明できないからである。そのためには、やはり貴族の内部世界における変化に対する検討が伴わなければならない。そういった角度から見れば、ジョンソンとイブリーの出した結論は、その妥当性の当否はともかく、今後の研究への一つの手がかりをつくってくれたといえよう。

(三)

以上いくつかの論者を中心に英米における中国中世貴族制研究の現況と問題点を私見を加えながら述べて見た。ここで今後の課題を二〜三指摘することによって結論に代えたいと思う。

まず英米での研究は今までの固定観念より脱皮する必要がある。詳しくいえば、「停滞」のイメージを克服し、貴族⇨官僚という公式化された概念を再検討する必要がある。こういう必要性はいうまでもなく中国における中世を正しく理解するためである。いくら精緻であっても、中世という時代の特徴に対する理解の欠けた中世貴族制研究にどういう価値があるだろうか。

次に英米の学者は今までの研究の諸成果をより幅広く消化する必要があると思う。英米の研究は確かに中国や日本の研究を紹介するのに止まっていた段階は越えている。これからはより独自の研究を進め、かつて中国や日本の学者が立入らなかつた新しい境地を拓かなければならないだろう。とはいえ、既存の成果が十分消化されないままに獨創性のみを唱えることは、研究の閉鎖性を強め、水準をむしろ低下させる恐れがあると思われる。

三つ目の課題は比較研究を進める必要がある。中国の中世を考える際にヨーロッパやその他の文化圏における中世をも検討かつ参考にする必要があることはむしろ当然ともいえよう。かつての唯物史観の如く、ヨーロッパ史より抽出された理論をもって世界史発展の基本原理とするといった誤りを防ぐためにも、比較研究の発展が切実に要求される。欧米の学者たちは、このような比較研究を進めるために中国や日本の学者より良い条件を備えており、彼らが獨創性のある寄与をする余地が、そこにはあると思われるのである。

(完)

① 小稿でいう中世とは、およそ後漢末以降唐末までを指す。英米の学者のなかでは中国史の時代区分に対する定まった意見がなく、呼び方もさまざまであるが、一応は日本の京都学派の時代区分法が広く使われている。

② 『東洋史研究』、三九一四、七五四―六四頁参照。

- ⑥ この本は最新 *Cin Tarihi* という題でドイツ語で書かれた。その後 *Chinas Geschichte* と題したドイツ語版がスライム出版された。英訳版はこのドイツ語版を訳したものであるが、ドイツは一九七七年出版された全面修訂版を参考した。Wolfram Eberhard, *A History of China*, Revised Edition, (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1977) 参照。
- ⑦ Wolfram Eberhard, *Conquerors and Rulers: Social Forces in Medieval China*, Revised Edition, (Leiden: E. J. Brill, 1965) 同く *Das Tobarietisch Nordchinas*, (Leiden: E. J. Brill, 1949)。
- ⑧ Edwin Pulleyblank, "Gentry Society: Some Remarks on Recent Works by Wolfram Eberhard," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 15-3 (1953), pp. 587-597。
- ⑨ 同上、五八九頁。
- ⑩ 同上。シモンタリーは士大夫を英訳する際にきつと使われてくる語彙である。が、士大夫の概念がシモンタリーの原語の持っている意味と必ずしも一致しなためにはしばしば問題が起きるのである。例をば英国のシモンタリーは土地の所有を身分の前提とするが、中国の士大夫はきつとはらえない。更に、ホーナーの場合には、シモンタリーを「中国の文獻には当る言葉がなく」(『中国史』六九頁)、「士農工商の士に当る」(『征服者』四二頁)、「現代のアメリカで通用されるの意味ではなく、マルクス主義的な意味で定義された概念」(『中国史』三六五頁)などという、極めて曖昧かつ自己矛盾の立場を取ったために、非難を浴びたのも当然だったかも知れない。
- ⑪ Wolfram Eberhard, "Additional Notes on Chinese Gentry Society," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 17-2 (1955), pp. 371-377。
- ⑫ Edwin Pulleyblank, *The Background of the Rebellion of An Lu-*

shan. (London: Oxford University Press, 1955), 44頁の本の一部が「安祿山の出自について」(『史学雑誌』六一卷所収)と「安祿山の反乱の政治的背景」(『東洋学報』三五卷所収)と二つ題で日本で発表された。

- ⑬ *Perspectives on the T'ang*, Edited by Arthur Wright and Dennis Twitchett, (New Haven: Yale University Press, 1973)。
- ⑭ 同上、四一八-四五頁。
- ⑮ 上掲論文、六一頁。
- ⑯ 同上、五六頁。
- ⑰ 同上、五五頁。
- ⑱ David Johnson, *The Medieval Chinese Oligarchy*, (Boulder, Colorado: Westview Press, 1977)。
- ⑲ Patricia Ebrey, *The Aristocratic Families of Early Imperial China: A Case Study of the Po-ling Ts'ui Family*, (Cambridge: Cambridge University Press, 1978)。
- ⑳ 上掲書、五頁。
- ㉑ David Johnson, "The Last Years of a Great Clan: the Li Family of Chao-chün in Late T'ang and Early Sung," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 27-1 (1977), pp. 5-102。
- ㉒ 趙郡の李氏の住居範囲が全国的規模となる前の段階としてシモンソンは、趙郡内部における李氏一族の分散を指摘する。彼によれば南北朝時代の趙郡の李氏は厳密にいつて趙郡平棘の李氏であった。ところがこの時代になると平棘の出身者はほぼ姿を消す。その代りに栢仁・元氏・房子・贊皇などの新しい地名が登場するが、これは、李氏の住居地が分散し、しかも一族のなかで相当の浮沈があったことを意味するのといえるであろう。上掲論文、一三二-一三三頁参照。
- ㉓ 上掲書、一八頁。

- ⑲ 同上、九〇頁。
- ⑳ 同上、九三頁。
- ㉑ 同上、一一三頁。
- ㉒ 谷川道雄『中国中世社会と共同体』(国書刊行会、一九七六)、一五三頁。
- ㉓ 概括的なヨーロッパ中世論については、例えば、Georges Duby, "Les sociétés médiévales: une approche d'ensemble," *Annales. Economie, société, civilisation*, I (Janvier-Février 1971), pp. 1-13 参照。
- ㉔ フロックスはこのような関係に *le lieu de dépendance* という名を付けた。その形成及び発展については、*La formation des lieux de dépendance* という副題が付いている彼の大著 *La société féodale* の第一巻を詳し。この本は L. A. Minyon の英訳 (*The Feudal Society*, 2 volumes, University of Chicago Press, 1961) や新材料などの他による和訳『封建社会』上・下二巻、みすず書房(一九七三)がある。
- ㉕ フロックスは中世ヨーロッパ貴族の本質はその武人たる点にあると理解した。ところがその後継者ともいえるジョルジュ・デュボア(Georges Duby)は中世初期には領主(*dominus*)と武人(*militans*)との間に明かに違いがあり、しかも後者が前者に隷属している場合がしばしばあったといい、貴族＝武人の概念が成立するのは十三世紀を過ぎないと主張した。デュボアの学説については彼の "La noblesse dans la France médiévale," *Revue historique*, 85^e Année, Tome CCXXVI (1961), pp. 1-22, "Situation de la noblesse en France au début du XIII^e siècle," *Tijdschrift voor Geschiedenis*, vol. 82 (1969), pp. 309-215, などを見参照。要するにフロックスがカロリング帝国の崩壊による中世を一つの時代の断絶と理解したのに対し、デュボアの方はその前の時代との連続性に着眼したともいえる。
- ㉖ Robert Somers, "The Society of Early Imperial China: Three Recent Studies," *Journal of Asian Studies*, 38-1 (1978), pp. 127-142. この文章はデュボアとインブリーの著書を加えて中国人学者羅回祖 (Ch'u Tung-tsu) の *Han Social Structure* (Seattle: University of Washington Press, 1972) を取り上げられている。
- ㉗ 上掲論文、一三四頁。
- ㉘ 同上、一三三頁。張仲礼 (Chang Chung-li) の研究は、*The Income of the Chinese Gentry*, 回炳棣 (Ho Ping-ti) の研究は、*The Ladder of Success in Imperial China* を参照せよ。
- ㉙ 上掲書、一頁。
- ㉚ Imperial China (「帝制中国」あるいは「中華帝国」という言葉は秦朝による統一以来清末に至るまでの金時代を指すために英米学者のなかで広く使われている。この場合、秦帝国以前は、ふつう Classical China (「古典中国」と呼ばれる。なお Imperial China を二つに分けて明以後を後期とすることが常識になっている)。
- ㉛ 時代区分に対する英米学者の典型な態度はトウィッチェットの次のような言葉によく現われている。「この問題(＝時代区分)は歴史学上の論点とどうより一つの信条として扱われる傾向が強い。」上掲論文、四七頁。

(John Lee さん) 大学大学院生